

# 【ロシア連邦サハ共和国】

(地理と歴史)

バイカル湖の北東、アムール川の北、北極海に面し、中央を南から北へと大河レナ川が流れている。「ヤクーチアダイヤ」に代表される鉱物資源の宝庫。17世紀以降ロシアが進出し、ロシアの影響下に入る。サハ人は、もともとヤクートと呼ばれ、ヤクーチア自治共和国とも呼ばれる。サハ（ヤクート）人自身も、もともとトルコ・モンゴル系遊牧民族で、13世紀以降、バイカル湖周辺から北進し、ツングース系のシベリアの先住少数民族エヴェンキ、エヴェン、オロチョンと戦い、融合してきた歴史がある。また、古アジア系と呼ばれるユカギール人が中央シベリア最古の先住民と考えられる。

(人口)

サハ共和国は、ロシア連邦の構成共和国の一つだが、ウラル山脈より東のロシアの四分の一、3,103,200平方km。日本の国土面積約378,000平方kmの8倍以上。総人口は、約95万人。そのうちサハ人が43万3千人で45.5%。17世紀以降進出してきたロシア人が39万人で41.1%、先住少数民族のエヴェンキ、オロチョンらが3.3%で約3.3万人以上となっている。

(気候)

日本では、ベルホヤンスク、オイミヤコンなど零下70度を超える酷寒な大地として知られるようになっていく。夏は30度を超える大陸性気候で、冬と夏の気温差が100度を超えている。零下50度が頻繁に訪れる厳しい冬を潜り抜け、太陽の活動が最も活発となる夏至の日が、サハの暦では新年と受け止められ、イシアフと呼ぶ山から上る太陽に手をかざしてエネルギーを受け止める夏祭りが最大のイベントとなっている。太陽信仰は、サハの英雄叙事詩「オロンホ」でも顕著で、太陽神トヨンが英雄を地上に派遣し、地下の魔物に惑わされる人々を救うという、天上天下地界の世界観は、古事記に記された、アマテラスとスサノオの神話を思わせる英雄物語となっており、広く東アジアを覆う太陽樹宇宙樹生命樹の世界観に重なるものであり、前文化大臣のアンドレイ・ポリソフ氏は、オロンホには日本の知識が残されていると話す。

(文化)

サハの文化は、先住民族、遊牧騎馬民族であったサハ、ロシアなどの文化の混雑が顕著で、トルコ系、モンゴル系、エヴェンキ系、ロシア系などの言語、神話、伝説、歌謡が一体となっている。サハの伝統文化復活が図られたのが、愛川町での和太鼓研修であったが、それはゲルマン・クウラウディアというサハ国立劇場専属音楽家であるハトラエフ夫妻が、博物館に残る楽器群を復活させる創造的精神を媒介にして、伝統的の歌謡、伝統的楽器を活用し、サハの伝統的太鼓に魂を入れて表現された新しい伝統、生きた文化としてサハ人、ロシア人、先住民族の人々に受け入れられるようになった、現代の芸術創造の試みだと評価される。

ユーラシアンクラブ ニュースレター第88号 2006年12月1日 1頁  
ユーラシアンクラブ ニュースレター/ここはいつも旅する 加藤 九祥 ユーラシアンクラブ ニュースレター/ここはいつも旅をユーラ

## ユーラシアンホットライン

サハ共和国を中心にした太鼓シベリアツアーが成功 「国民栄誉賞」を受賞 大野 遼

私は11月上旬、既に深夜には-90度を記録していたシベリアのサハ共和国を訪問しました。昨年3月、英雄叙事詩オロンホを題材にした音楽劇「キース・デビリエ」の日本版総合プロデュースをし、またこの10年ほど、現在同国対外経済産業省の副大臣(当時在日サハ共和国代表部代表)の紹介で、ハトラエフ夫妻を日本に招聘してから、ほぼ毎年のようにシベリアの本物のアーティストを通してサハを紹介する活動の中で、サハ共和国文化大臣アンドレイ・ポリソフ氏と懇意になりました。



で通路に椅子を出したり、立ち見の客も受け入れて500人の超満員となりました。聴衆の反応は大変よく、山口さんの日本文化紹介も好評で、最後は2日間ともスタンディングオベーションで終わりました。

私は、文化大臣との懇談や公演初日の舞台挨拶でも話しましたが、シベリア・サハ共和国には、英雄叙事詩オロンホだけでなくアジアのトルコ系騎馬民族の精神文化、シベリアの先住民族ユカギールやエヴェンキの文化などさまざまな民族文化が残っており、日本と同様、吹き溜まり的文化状況に共通性があり、日本とサハ共和国との文化交流は、アジアの歴史的・精神的文化遺産の交流という性格も持っている。太鼓の種類が豊富なことも日本とサハ共和国の共通性である事を指摘しました。

ポリソフ文化大臣は、サハの若い太鼓演奏者を太鼓の研修所で研修させてもらう希望を語り、また日本の国立劇場での研修も希望しました。

サハ共和国は今回の訪問に際して、私にサハ共和国大統領名による国民栄誉賞を授けました。サハと日本との文化交流への貢献ということでしたが、最も大きな要素は、昨年の「キース・デ



【写真】上：ヤクーチア紙、太鼓コンサートの紹介と筆者へのインタビュー記事 下：サハ共和国国民栄誉賞メダル

そしてこの間、ハトラエフ夫妻の希望を実現する形で、佐渡の太鼓文化村を訪問したのが契機になって、太鼓の菅野啓司、金子竜太郎両氏がヤクーツクを訪問、また翌年ユーラシアンクラブと太鼓の協力で、サハ共和国の太鼓職人、ヤクートの若手太鼓アーティストとハトラエフ夫妻を日本に招聘して佐渡で交流が行われました。今年夏には、太鼓の夏の音楽フェスティバルアースセレブレーションにハトラエフ夫妻が参加し、6月のシカチアリヤン村のためのチャリティ・コンサートに参加してくれた篠笛の山口基氏、太鼓の金子竜太郎氏と共演を果たし注目されました。

こうした経緯を経て、太鼓が国際交流基金のサポートを得て、サハ共和国の首都ヤクーツクでの公演を中心とした太鼓シベリアツアーが実現することになりました。私は、ヤクーツク公演のコーディネーターとして先乗り形で、厳寒の地での楽器の受け入れ、記者会見やテレビの生放送、リハーサルの際段取りを準備し、サハ側の太鼓を中心とした演奏グループ「テティム」の制作協力者として活動しました。

サハ共和国の受け入れはアンドレイ・ポリソフ大臣の指示を得て、全面的に文化省と国立劇場サハ劇場スタッフが協力してくれたおかげで、私や太鼓の注文は全面的に遂行され、二日間の公演は大成功で、400席の客席は4日間も2公演とも完売。強い要望

ビリエ」日本公演が準備され、ロシア連邦政府から英雄叙事詩オロンホのための国立劇場建設が認められたことであると同った。受賞は、アンドレイ・ポリソフ文化大臣の今後への強い期待も込められていると受け止めています。これまで私を支えていただいたユーラシアンクラブの仲間や友人の皆さん及びユーラシアンクラブの活動への名譽ある受賞だと考えています。改めてお礼を申し上げますとともに、今後ともご支持をいただくようお願いいたします。

## 【ロシア連邦ハバロフスク地方ハバロフスク区シカチ・アリャン村】

(アムール流域の先住少数民族) アムール川は源流からだると全長4368kmで世界8位、流域面積は185万5500km<sup>2</sup>で世界10位の大河。シカチ・アリャン村の住民370人の8割以上を構成するナナイ人は、アムール流域に点々と集落を営み、1860年の北京条約で、清国とロシアの国境線が変更された結果、清国側にいたナナイは「ホジェン」と呼ばれ、5,350人、ロシア側には12,160人が暮らしている。アムール川の名称は、17世紀にロシア人がシベリアに表れて、ソロンやエヴェンというツングース語の表記から採用されたとされる。アムール河で暮らす、ナナイやウリチの言葉では「モンガボ」、「モンゴー」、「マンゴー」、「マンゲー」と呼び、チンギスハンが即位したアムール川上流のオノン川が「モンゴル(永遠の川)」と呼ばれたことも、アムール川のもう一つの呼称として興味深い。



(生業) アムール川で漁労に従事し、狩猟、キノコやキイチゴの採集も行い、菜園で夏野菜やジャガイモなどを育てている。以前は牛も飼育していたが少なくなっている。サケの遡上シーズンには、村上げて、川べりに小規模のテントを設営して、仮眠をとりながら一晩中、網をかける。サケのシーズン以外でも、チョウザメ、コイ、カワカマス、ナマズ、などを採取し、サケの魚皮を加工した衣服、靴を作っていた。2015年5月から2016年1月まで、下記の神話伝説も含め、解説図録を作成し、大阪の国立民族学博物館、新潟県立歴史博物館、横浜ユーラシア文化館で「岩に刻まれた古代美術 アムール川の少数民族の聖地シカチ・アリャン」展を開催し、4万人以上の観覧者がありました。

(シカチ・アリャン村の射日神話と生命樹・宇宙樹・太陽樹)

シカチ・アリャン村のナナイの間には、「昔、三つの太陽が輝いており、暑くて困っていた。弓の勇者が現れて、二つの太陽を射落としたので人間が住めるようになった」など、いくつかのバリエーションの「射日神話」が知られている。この神話は、殷の「十日神話」(昔10の太陽が一斉に並び出て苦労したので弓の勇者羿が9つの太陽を射落とし暮らせるようになった)一白川静はナナイの射日神話の源流と指摘)やメオ族の「10人のおてんとうさまの物語」が、日出国「日本」の元になった「扶桑」国(鳥の形で扶桑の枝にとまる太陽)、そしてアマテラスの「岩戸神話」、そしてナナイの生命樹につながる「太陽樹」信仰の体系を形成していると考えられている。

(シカチアリャン村西端のガシャーン岬で13000年前の土器発見；日本湖時代の「環日本海交流の源流」－「極東平底土器の祖型」(大貫静夫元東京大学教授)と注目)

ガシャーン岬のガーシャ遺跡の最古の土器は、日本の大平山元遺跡(青森県外ヶ浜町)、後野遺跡(茨城県ひたちなか市)でかつて出土した土器と比較され、斧形石器を伴う「旧石器・縄文移行期の土器(谷口康弘国学院大学教授)、「細石器と同じ現在の国境を超えた文化圏」(可児通弘元東京都埋蔵文化財センター主任研究員)と考えられ、文化遺産のタイムカプセルであるシカチアリャン村を世界遺産に登録しようという文化運動が始まっている。

(日本湖時代から日本海時代に移行しても、海を渡って日本列島に移住したシカチアリャン村の祖先)

シカチアリャン村が所在するアムール河右岸の岸边には、巨大な玄武岩が累積しており、岩肌を削ったり、刻んだりして描かれた岩画が150点以上確認され、極東最大の岩画遺跡として知られている。この岩画の中には、オオシカ、鳥、人面画、蛇、舟などが描かれ、かねて北海道の余市町のフゴッペ洞窟、小樽市の手宮洞窟の岩に刻まれた、舟や人物と酷似すると注目されてきた。そして、フゴッペ・手宮の洞窟に描かれたシャーマンや人物の岩画は、極東・シベリアの民俗信仰として伝えられているシャーマンの衣装に疑いが無い。今回、若者たちを引率して来日したドンカン ビクトリヤさんは、アイシマを創設したナナイの伝統文化継承者であり、シカチアリャン村の学校教諭でもあるが、村のシャーマンとして尊敬を集めている人である。今回の来日に際しては、青年たちが帰国する8月14日以降、茨城県ひたちなか市、青森県外ヶ浜町、札幌市の国立アイヌ民族博物館設立準備室を訪ねて今後の協力について話し合うとともに、小樽市、余市町も訪問し、自治体間交流について話しあう予定である。